

ちっちゃいものくらぶ

はまぐり(さん)

はまぐりさんといえばお雛祭りの時のすまし汁によく使われるね。網で焼いて食べるのもすごくおいしい。ホンビノスガイ(さん)ははまぐりさんとちょっと似ててかなり有名になったけど、ネットのある味の評価では、はまぐりさんが「非常に美味」なのに対し、ホンビノスさんは「まずくはない」って書いてあった。個人的には、私はどちらも好きだけどね～



って、今日は食べちゃうお話ではなくって、はまぐりさんを使ったお勉強の体験のお話をするよ。

「なぜ私たちは誤るのか」ということを考える授業に参加した時のこと。講師は京都大学総合博物館の大野先生。まず7～8人のグループを作る。最初に先生に「はまぐりさんの貝柱はいくつだと思う？」と予想を聞かれる。それから一人一つずつはまぐりさんを渡される。(中身はないよ)そして、はまぐりさんの模様とかも詳細にスケッチする。よく観察した後で、貝柱はいくつかを自分なりに考える。その後グループで話し合い、グループごとに結論を出すんだ。

先生の書いた文章があったので、そこから引用させていただくと、下表のようになる。(参加者が50人でやってみた、ある授業の時の結果だよ)

貝柱の数	1つ	2つ	3つ
1 当て推量	3 3	1 6	1
2 観察後	5	2 4	2 1
3 対話後	0	4 6	4



対話が正解に導く

私は最初1つだと思った。でもスケッチしながらよ～く見たら2つかもとなった。その後グループで話し合った結果3つという結論を出した。私たちのグループは話し合っても正解は導けなかったわけだけど、私が気づかない所に注目している人もいて、人はそれぞれいろんな見方をするんだなということが感じられとても面白かったよ。

貝柱が3つと思ってしまったのは、入水管や出水管が収まる半円形のカーブしたところに、ありもしないもう半分の輪郭を勝手に補ってしまった結果なんだ。でも先生の解説では、ありもしない輪郭を補うことは、危険な世界で生存率を高めるのに役立つのではないかということ。ヤブの向こう側にライオンがいるように見える時、それが本当でも単なる錯覚でも、とりあえず逃げれば生きられる。何かいても輪郭を補うことができなければ、ライオンに襲われてしまうかもしれない。多くの人が輪郭を補って3つ目の貝柱の跡を見てしまうのは、私たちの脳に野生時代の生き残り術が息づいているからでなないか、と先生は

述べられている。

さて、どうすれば誤りを正せるのか。私たちの思考回路の弱点をただす仕組みは「対話」であり、グループで話し合い各自の論拠をぶつけ合い、補いながら多くは正しい答えにたどりつけるそうなんだ。

じゃあ、私たちのグループっていったい……………。

まあそれはご愛嬌ということで。

